そいみじうおはしませといふ、また權大納言殿周○伊をとひ奉れば、それもいとやむごとなくおはします、いかづちの相おはしますと申ければ、いかづちはいかなるぞととふに、ひときはゝいとたかくなれど、のちどものなきなり、されば御するいかゞおはしまさんと見えたり、中宮大夫殿こそ、かぎりなくきはなくはおはしませ、とこそ、人をとひたてまつるたびには、此入道殿をかならずひきそへ奉りてほめ申、いかにおはすれば、かくたびごとにはきこえ給ふぞといへば、第一の相には、虎子如渡深山峯なりと申たるに、いさゝかもたがはせ給はねば、かく申侍るなり、このたとひは、とらの子のけはしき山のみねをわたるがごとしと申なり、御かたちようて、いはゞ毘沙門のいきほひ見たてまつるがやうにおはします、御さうかくのごとしといへば、たれよりもすぐれ給へりとこそ申けれ、いみじかりける上ずかな、あてたがはせ給へる事やはおはしますめる、帥のおとゞは大臣まですがやかになり給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり、いかづちはおちぬれど又もあがる物を、ほしのおちていしとなるにぞたとふべきにや、それこそかへりあがることなけれ、

〔大鏡七道長〕今の衞門のかみ○實成ぞ、とくよりこの君○右馬頭顯信は出家の相こそおはすれとの給ひて、中宮大夫殿○能信のうへに御せうそこきこえさせ給ひけれど、さるさうある人をばいかでかとて、後に此大夫殿をばとりたてまつり給へるなり、正月にうちよりいで給ひて、この衞門督馬頭の物よりさしいでたりつるこそ、むげに出家の相ちかくなりて見えつれ、いくつぞよとのたまひければ、頭中將○能信十九にこそなり給ふらめと申給ひければ、さてはことしぞし給はんとありけるに、かくときゝてこそ、されば、よとのたまひけれ、相人ならねどよき人はものを見給ふなり、

〔續古事談二臣節〕土御門右大臣○具平親王子源師房ムマレテ二歳ノトキ、後中書王○具平親王ノ給ケル、コノチ